

沢村誠志著 切 断 と 義 肢

リハビリテーションの分野における切断者と義肢の問題はここ数年のうちに大きな転換期をむかえようとしている。すなわち工学的技術の導入、専門職種（とりわけ義肢装具製作士）の教育資格制度の検討化、行政上のさまざまな問題に対する取組み等徐々にではあるが従来に比べるとかなり大勢の人々の関心が向けられるようになってきた。

この分野における著書、参考書もすでに武智・明石両先生の「義足」、「義手」、飯田卯之吉先生の「義肢—その理論と実際」等のおのおの特徴ある書物が刊行されている。このたび沢村先生の書物が加わったことは同じく義肢装具関係の仕事にたずさわっている者として大変喜ばしい次第である。著者は周知のように我国医学界におけるこの方面の第一人者であり、最近では日本リハビリテーション医学会義肢装具委員会の委員長、日本整形外科学会義肢装具委員会のメンバーとして教育研究開発、行政上の施策等さまざまな問題に対して日頃努力を払っておられる。この書物は序文にもあるように10数年来切断者のリハビリテーションに

たずさわってこられた著者の経験をもとにまとめられたものであり、内容も欧米で発達してきた義肢をいかにして日本での生活様式や職業に馴染ませるかという著者の努力がいたるところにありありとうかがい知ることが出来る。

本書は四つの章からなり、まず第一章では切断者の実態、切断部位の選択、切断手技等主に医学的な面が述べられているが、特に末梢血管障害と悪性腫瘍による切断に項目をさいてあり、実際にこのような切断を扱う者に有益であろう。第二章では義手の数多いパーツの説明からアライメント、各上肢切断のハーネスのとりつけ方、更には外力義手の問題まで要領よく説明されている。

義足をあつかう第三章はこの書物のなかでも圧巻というべきであり、著者の永年にわたる経験が数多い写真や図とともに見事に展開されている。沢村先生は10数年前アメリカ留学中にUCLAの義肢装具のコースを受講されアメリカの義肢製作士と共に自ら義足のソケットを作られたということを知っているが、単に理論だけでなく実際面での注意が多

く述べられていることは読者にとって参考になる点が多い。

更に第四章では切断者のリハビリテーションとして断端の処置から術直後義肢装着訓練まで述べられてある。

巻末の文献リストも豊富であり更に詳細な知識を得ようとする場合に便利である。

もっと悠ばるならば、老人切断や小児切断等特殊な問題をも独立させて扱っていただければよかったと考えているが、これは改訂版の機会にでも是非お願いしたいものである。

このように本書は切断者と義肢にかかわる全ての職種—医師、セラピスト、義肢製作士、看護婦、心理判定員、MSW等に参考になるものであり、とりわけ経験豊かな医師のアドバイスを受ける機会が少いまま臨床の場で切断者を扱う機会の多いセラピストにとって必携の書といえよう。

(A5, 450頁, 4,000円, 医歯薬出版
リハビリテーション医学全書第18巻)

(東京都補装具研究所長

加倉井 周一)